
ヒポクリット

NAO

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ヒポクリット

【Nコード】

N5882A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

私の名前は、タダフジサヤ直藤沙耶、高校生。眉目秀麗な容姿を持ち、頭脳明晰、さらには、身体能力も他の追随を許さず、なおかつクラスの話題の的。そんな私が、最近思っていること、それは 人間はなんて素敵なんだろうってこと。

第一話（前書き）

ヒポクリット【hypocrite】∴猫かぶり。偽善者。

ヒポクリット

第一話

私の名前は、直藤沙耶^{タダフジサヤ}、高校生。

眉目秀麗な容姿を持ち、頭脳明晰、さらには、身体能力も他の追随を許さず、なおかつクラスの話題の的。

私を簡単に紹介するのなら、今のが最も分かってもらえると思う。でも、公衆の面前でそんなことは言わない。

だって、言ってしまったら他人のひんしゆくをかってしまう。私はそんな馬鹿なことは絶対にしない。政治家の言動のように、一挙手一投足を慎重に吟味している。そんな誰もが羨望のまなざしで見つめる私が、最近思っていること。それは

人間は、なんて素晴らしい動物なのだろう、ということ。

思っていることと行動が、必ずしも一致していないところが素敵。目に映る人間は、その表層しか見えていないのが素敵。嘘をつけることが素敵。抱きしめたいほどに偽善的な人間が素敵。

特に、私という人間が素敵。

「直藤さん、この問題やった？」

浮雲の白をとりとめもなく眺めていた目を引き剥がし、前の席に座っている女子生徒に貼り付ける。

私は美しい微笑を作りながら答えた。

「うん。昨日慌ててといたんだけど…難しい問題だよ、それ」

とても簡単な問題だった。私はそれを三分とわからずに解いた。

それも課題を出される一週間前に。私は友達の親身になった風を装った。当然の返答。難しいと相手に思わせることで、「そうだよね」と相手の返答を誘う。これは、私という絶世の存在をより身近に感じさせるための技術。

「そうだよね」

ほら言った。なんて単純なんだろう、人間は。だから素敵。

「でさ、教えてくれない？ 私、できなかつたんだ」

もちろん私は嫌と言いたかった。なぜかといえば、面倒だから。他人の世話などしたくない。でも、私はそれを快く首肯した。

これによる効果は「直藤さん、優しいね」と相手の脳に記憶させることが出来る点。私は罪悪感を心の中に押し隠し、教え始める。

「ここはね」

こんな問題も解けないなんて、何のために学校に通っているのかしら。ま、仕方がないか。私と違って、馬鹿だから。

心の中でさげすみながら、私の中で優越感、満足感が広がっていく。

「そう言えば、佐藤さん、髪形変えた？」

私はすかさず技術を使った。この後の彼女の返答も、私の対応の技術も分かっている。分かっているからこそ、聞いた。

「え、分かる？ ……どうかな？」

不細工を体現した感じ。目を背けたくなるくらい。

「カワイイね。似合ってる」

対極をなす答えが、私の心と口から出た。女子生徒の顔が喜びに染まるのを瞳に映しながら、私も下卑を押し隠した笑みを作った。

私は内心で彼女を見下しながら、こう思っていた。

「カワイイね」は、「皮良いね」よ。肥えた良い皮をお持ちになって。そんな多大な肉を持って歩くのは、さぞかし大変でしょう。

「…彼は、気づいてくれないんだ…」

私は彼女の言葉に驚きを隠せなかった。私としたことが、少々顔に本心をにじませてしまう。

信じられない。

こんな女に彼氏がいるなんて。よっぽど彼氏が酔狂なのか、盲目なのかのどちらかだろう。私は彼氏に同情心を抱くと共に、彼氏の醜美の基準と、その判断を疑った。

「どうかした？」

ええ、信じられない。あなたに好意を抱く人がいるなんて。

「どうして気がつかないのかなって、彼氏が」

あなたが醜いって。

「あなたが髪形変えたって」

もちろん私は、この間中笑顔。おそらくこの美しい笑顔を見て、私を美人だと認識しない人はいないだろう。それだけ私は自他共に認める美貌を持っている。数日前も他校の生徒から告白された。そのとき私は、流れ作業のようにいつもどおり、

え…急にそんなこと……。

と、少しの逡巡と困惑を言葉に表した。これは、私のせめてもの憐れみ。本当は、「身の程をわきまえて」と即答したい。

だって、私にはつりあわないもの。

天秤にかけたら、私の偉大さに男が天へ飛んでいってしまうに違いないと断言できる。だから私は、数秒の沈黙を挟んでこう言った。胸中で侮蔑をもてあそびながら。

…ごめんなさい…。私、好きな人が…。

これは繰り返し使えて、きわめて便利な手段。こういえば男も引き下がるし、他の断り方とは違って、男に「なぜ」と、言及されなくて済む。でも、困ることもある。

それは、誰？

こう聞かれること。実際私には好きな人がいる。とてもウイットに富んでいて、素敵な人。でも私はその人の名前を出すことはない。その人が迷惑するのが目に見えているから。私はそういう時、仕方なく顔を伏せる。私の流れるような黒髪で、表情を隠すために。そして、哀切と震えの混じった声音を作って、

…ごめんなさい。

そう言って走り去る。そういえば男は追いかけてこない。走りながら、私は含み笑いをし、再確認する。人の心をもてあそぶ享樂と、それが出来る私の美しさを。その後、私は鏡を取り出してこう言う。

あなたが、好きです。

鏡に映る才媛、つまり私に向かって。

「それでね、これが彼なんだけど…」

そういいながら、私に対してぶしつけに携帯電話に張られたプリクラを見せる。そこには、二つの頬をくつつけた男女が、満面の笑みで私を見つめていた。男は、数日前、私が丁重に交際を断った男だった。

「お似合いね」

そう、いろいろな意味で。何事にも釣り合いがあるもの。彼氏には、謝罪しなくてはならない。そして、こう言葉尻に付け加えるの。現実を理解するのは、さぞかし辛かったでしょう、と。

「…ありがとう」

彼女は顔にプリクラと同じくらいの満面の笑みを称える。私もとりあえず、彼女の何倍にも美しい笑顔を返した。

そのとき、私の耳に休み時間終了のチャイムが飛び込んでくる。全ては私のプロット通り。

休み時間は女子生徒たちとのコミュニケーションを図る。彼女たちの意思には、とりあえず肯定しておく。そのほうが、都合がいい。加え、その意思をほんの少し後押ししてあげるとなお良い。「だよね」と彼女たちに言わせればいい。それだけで、話の輪に自然に溶け込むことが出来る。そして、落ち込んでいる女子生徒がいれば、慰めてあげる。理由を聞き、同情し、ここでも女子生徒の言い分を後押しする。ここで注意するのは、彼氏のこと。消沈している場合、彼氏の悪口を言うのを避けて、彼氏の思いを尊重しつつ、女子生徒の背を押してあげる。

ここで注意点。他人の悪口はどんな場面でも言わないほうが良い。私のいないところで、人づてに悪口を言っていたことが伝われば、後々に不信感を抱かれる原因になる。

…その他にも、いろいろと細かい技術が必要なものの、それは企業秘密。

変わって、男子生徒はもっと扱いが楽。私が綺麗だったことだけで悪態をつくものはいないし、話しかけられても、女子生徒と比べて少しそっけなくすることで、女子生徒から嫉妬されなくて済む。

もし、告白されたときは、前述のようにして回避。尻軽女と怨恨を受けるから、自分からはなるべく男子と話をしない　用事があるときは別だけど。

次に、最も簡単なのは先生。学期毎にあるテストで満点に近い点数を取ればいい。それだけで先生は、私にまじめな生徒というレッテルを貼ってくれる。

最後に、この全てに共通するものがある。
笑顔。

笑顔は、心を巧みに隠蔽する仮面となる。これさえたたえていれば、私に負の感情を抱くものは皆無に等しい。

これら全ての技術を用途に分けて駆使するのは疲れるけれど、学校生活における人間関係を円滑にするには仕方のないこと。

人間は素敵。

教室のドアが開いて、先生が入室するのを横目に、私はほくそ笑んだ。もちろん、心の中で。

ドアの開く音に気がついた女子生徒は、狼狽する。

「あ、先生来ちゃった」

助かったわ。あなたと話さなくて済む。

「どうしよう…」

自業自得よ、いい気味。

「ね、お願い！　ノーと写させて」

絶対に嫌。ブスが感染しそう。

「いいよ。情けは人のためならず、って言うしね」

「さすが話がわかる！」

嬉しそうに、両手を胸の前で合わせる。

ことわざの意味も正確にとらえてないわね。この様子では。さすがにこの問題も解けないだけのことはあるわ。

「それじゃ、直藤さん、借りるね」

せいぜい頑張ってるね。馬鹿なりに。

私は彼女にノートを渡した。先生が、なにやら予習と授業態度の

ヒポクリット

ことで小言を言っている。私にはまったく関係ないことだ。
私はほんやりと白い浮雲に視線を送りながら、考えていた。
偽善という美しい行為について。

第一話（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。「スクール・オブ・ザ・デッド」に続く新作ですが、これは
高校時代に書いたものを少しだけ書き直したものです。今と少し
文体が違いますね。五年前の文章などこんなものでしょうか。評価、
感想、栄養になります。

第二話

人が白眼視する偽善は、他人に知られない限り偽善ではない。自分が一体、いつ、なんどき、偽善的行為をしたことで、他人に迷惑をかけたのか。

答えは、否。

私は逆に他人の役にたっている。ノートを貸し、課題の提出を遅らせるように先生に進言し、似合わないのに褒めて喜ばせたりと、他人に幸福を与えている。こんな私を知られば、きっと誰もが反対し、槍玉に挙げるだろう。

しかし、私はあえて言う。他人に対する偽善は行うべき、と。

たとえば、不細工な人間に、不細工、と言った人がいるとする。誰が不細工と言った人間をかばうだろうか。真実を語ることが善であるならば、そう言うことも仕方ないはず。なのに人は、真実を語る人間を糾弾する。そしてあるうことか、被害者と目される人物に同情する。もし、ひどいよね、と言って被害者に同情したとするのなら、それは、何に対して同情したのだろう。

もっと詳細に言い換えてみる。

「不細工な…さんに、不細工と真実を言うなんて、…さんはひどいよね」

おそらく同じか、もしくは近い内容になるはず。みんな分かっている。分かっているのに同情するなら、それは立派な偽善ではないのか。

「…さんは、不細工じゃないよ
偽善。」

「気にしないで」
偽善。

一方で。

「性格はとってもいい」

真実。

「これから綺麗になろう」
過程的な真実。

でも、真実はやはり糾弾されてしまう。慰めになっていない、と。その言葉の真意。

不細工な人。不細工といった人。そこに必ずと言ってよいほど現れる人間。言われた人に、言った人の悪口ばかりいう人間。どうしてもそればかりを言って、言われた人を慰めようとするのか。その行動の真意。

この二つの真意こそ、不細工といわれた人に対する侮辱であり、立派な偽善として大成されている。

つまり、慰めという一見優しい行為の発端は、不細工な人が不細工であると理解しているから、憐憫の情を寄せているにすぎない。

ひとつの結論に達し、私はさらに回想する。

私の中学校時代は、クラスの中で孤立しているという惨憺たる日々だった。嘘は泥棒の始まり、をかたくなに守った私は、ノートを化してといわれれば、面倒だから嫌と言い、あるとき彼氏の写真を見せてくれた女子生徒に、

「…さんには釣り合わないね」

と、本心を言った。

髪形がどうかと聞かれたときも、似合わない人には、
「似合わない」

と、はつきり言った。

嫌いな人には笑顔すら見せず、露骨に嫌な顔をした。不細工な人には、

「…さんは、顔はあまり良くないけど、性格はとても良いよね」
と、言った。

全て私の本心。そして、真実でもあった。なのに、私は忌み嫌われた。真実を言っているのに。嘘は泥棒の始まり。それは真理だった。嘘は、真実を語る私からクラスメイトを、評判を奪っていった

のだから。

苦難の日々を耐え抜き、中学校卒業にあたって、私は私を知る人のない土地の高校へ入学し 仮面をかぶった。

今の私がそう。顔良し、頭良し、性格良し、加えてクラスの注目の的。これらの内二つは、偽善がくれた。性格とクラスの注目の的がそう。もともと人を見下すことに嗜好を見出し、他人より優れていることを誇りにし、人を操ることに快楽を求めていた私だから、偽善はうってつけの技術だった。中学校時代に得ることの出来なかつた評判を、偽善という技術を行使することで手中にした。つまり、他人を見下し優越感に浸るのは心の中で、人を操る快感は、私を性格の良い人間だと思い込ませることで満たされている。仮面をかぶった私を、皆は完璧な人間とたたえる。みんな私にだまされている。これほどの満足感を味わえたことはない。

私は心中で叫ぶ。

人間はなんて素晴らしい動物なのだろう。

私は思考するのをそこで止め、先生の授業に耳を傾けた。

「じゃ、先週のテストを返すぞ。今回の最高点は」

どうせ私。このクラスで、この学校で主席、生徒総代の私。

「九十八点、直藤」

クラス中から、どよめきと、やっぱり、という喝采が上がった。

私は満足感に包まれた。そして

取れない人のほうが不思議。私は百点だと思ったのに、と蔑視した。

第三話

その日の学校生活も完璧に演じ、私は心地よい疲労感を背負いながら家路に着いた。

偽善は本来の自分ではないから大変。自分の中に二つの人格が存在しているのと同義。でも、楽しいのも事実。だって、人を簡単にだませるもの。

私は携帯電話を手に取り、街中でナンパされた男に電話をかけた。「セイジ？ 私。ねえ、聞いてよ、今日さ」

それは、もう一人の私。

学校での私とは別の、無邪気な私。

まるで、自分自身で小説を書いているように思えるこの行為は、日頃の「善人」である私を脱ぎ捨てることができる唯一の時間だった。

「それで馬鹿みたいなの。そのときソイツなんて言ったと思う？」

学校生活で言えないことを、このときにだけ言う。もう一人の無邪気な私は、それを可能にした。セイジはもちろん、私を無邪気でかわいい性格だと思い込んでいる。そうやって相手をだますことは、私にとって至上の快樂。

「あはははっ！ そうでしょー！」

学校では決して使うことのない高音域の笑い声。閉塞されていたものがあふれ出す開放感。この瞬間がたまらない。私は、セイジと三十分ぐらい会話をし。

「じゃ、そろそろ切るねー」

『ああ、またな。エリ』

私は、無邪気な役を演じる私に、エリと命名していた。

次に私は、別の携帯電話を取り出す。今取り出した携帯電話は黒く、セイジと会話していたものは白い。

私は、常に最悪の可能性を視野に入れているので、ひとつの携帯

電話にメモリを満載にはおかない。もしも携帯の中身を見られたときに、メモリが男だらけだったら、どう思われるか想像に難くないから。それに、携帯の色がはつきりしていれば、一目見たときに性格を簡単に変えることが出来るといふ利点もある。

私は、セキカワという男に電話した。

「もしもし……あの……マイ……ですけど」

今度はマイなる人物に変身する。

「実は……私の彼が……」

マイには彼氏がいることにしている。マイは、彼氏と意思疎通が上手くいかず、彼氏が二股をかけていると思いついでいる。内気で、積極性に欠けるので、人に意思を伝えることが下手。そんな、性格設定。

『うん。大体分かった』

私は電話越しに肩を震わせながら、心中で爆発しそうな笑いをこらえる。セキカワは一体何が「分かった」のだろう。マイなど架空の人物であるし、存在しないのであるから、当然分かることも不可能。だというのにセキカワは、架空の人物マイの相談に真剣になっている。

「……はい……分かります……それで……」

私は極力、か細く、声音に悲哀を宿しながらセキカワと話す。頭の中では、架空の彼氏に冷たくされていくマイ想像をしながら、私は役を演じている。

『じゃあね、マイ、頑張つて』

「はい……ありがとうございます……私……頑張ります……」

低音域のマイの声に、微々たる曙光を付け加え、私はセキカワとの会話をやめた。私は、今のセキカワとのやり取りを脳裏でよみがえらせ、ベッドの上で腹を抱えて転がっていた。

面白い。なんて面白いのだろう。

『彼氏に、面と向かってもう一度好きと言って見たらどうか』と、セキカワは私　いや、マイに言った。無論、マイは私であるし、

私には彼氏なんて邪魔なだけの存在はいない。なのにセキカワときたら、親身になってアドバイスをしている。私は笑いからくる腹部の痛みに、必死に耐えなければならなかった。

刹那、私の部屋に着信音が鳴り響いた。セイジにかけた白い携帯電話ではない。セキカワにかけた黒いのもない。

そう、私は三つ目の携帯電話を持っている。

通学用バックに入った赤い携帯電話が、流れるような和音を響かせている。その電話に出るのは、エリでもマイでもない。学校生活における偽善者である私。親切を装う私。

私は咳払いをひとつして、声の調子を確認した後、電話に出た。

「はい」

電話の相手は、ノートを貸した女子生徒だった。

『ごめんなさい。直藤さん。私、直藤さんのノート持ってきちゃったみたいなの…』

わざとでしょう。どうせあなた一人じゃ出来ないから。

「大丈夫。気にしないで。明日持って来てくれればいいから」

『本当にごめん…』

本当にそう思っているのかしら。

「うん、それじゃ、おやすみ」

『おやすみ』

もうかけてこないで。

私は赤い携帯電話をベッドの上に放った。シーツの上で跳ね上がったその振動で、近くにあつた白と黒、二つの携帯電話が揺れる。

白い携帯電話。それは無邪気に大声を張り上げるエリを演じ、セイジを始め多くの男たちと話すための電話。

黒い携帯電話。それは彼氏の二股を疑って人間不信に悩んでいるマイを演じ、相談相手のセキカワと話す電話。

赤い携帯電話。それは偽善的な私が、学校の友人たちとコミュニケーションをとるための電話。

その白、黒、赤の私は、どれも私が作った虚像。私の心を恍惚で

満たし、日常生活における私の疲労を払拭してくれる三人の私。

私はますますそれに熱中していった。

「だってアイツがさー…そうそう…あははっ！」
エリ。

「でも…はい…やってみます…」

マイ。

「明日、先生に聞いてみるから、そうみんなに伝えて
偽善的な私。」

「こんな問題で間違えるようじゃ、私の足元にも及ばないわね」
素の私。

「ありがとうございます…はい…そうなんです…彼が…」
マイ。

「課題の範囲？ 待ってね、えっと…」
偽善的な私。

「馬鹿は馬鹿で群れていればいいのに」
素の私。

「えっ、無理に決まってんじゃない！ かなり遠いからさ、私の家」
エリ。

「…彼が…私のこと…」
マイ。

「まったく、くだらない授業。分かりやすいと思ってるのかしら」
素の私。

「だから言ってるじゃん。あきらめなよ。しつこいんだよ」
エリ。

「…あの…私…また…その…」
マイ。

ヒポクリット

そして、二ヶ月が過ぎた。

最終話

二ヶ月を過ぎたある日、私はいつものように学校へ行き、いつものように自分の机に向かい、いつものように自習をして、いつものように演じていた。

…はずだった。

「直藤さん。ノート見せてくれない？ 私やってないんだ…」

ええ。困ったときはお互い様。

「嫌よ、面倒臭い」

私はいつものように笑顔をとたえながら女子生徒に言ったつもりだったが、彼女がこちらを驚いた表情で見ているので、聞き返した。

「どうしたの？」

彼女は慌てて、

「な、なんでもない」

そう言うと、前を向いてしまった。私はノートを取り出そうとした手を所在投げに見下ろしながら、彼女の表情を考えていた。

どうして彼女は、ノートを借りないまま引き下がったのだろう。

他人のノートを借りるといふ愚行に気がついたのだろうか。

私は特に深く考えず、思考を一時中断した。

結局、その日、その女子生徒と会話することはなかった。

放課後になり、家路に着く。両親はいつも残業で、家の中は私一人。私がテーブルに乗っている夕食を視界に収めたとき、赤い携帯電話が鳴った。配信されたばかりの新曲が、ダイニングキッチンに寂しく響き渡る。私が電話に出ると、クラスメイトの声。

『あ、沙耶？』

なれなれしく語りかけてきたのは、右隣の女子生徒。

『今日さー、日本史の香田ったらさー、私にこう言ったんだよ』

私は仕方なく、彼女の話に耳を傾ける。

『「体ばっかり成長させてないで、頭を成長させろ、頭を！」って、

もう最悪』

何言ってるんだろっね、香田先生は。私が明日注意してくるよ、はつきり。

「あはははっ、本当に？ それってセクハラじゃない？」

『……そう……だね……』

彼女の声が一気にしぼんだ。何か気に触ることも言ってしまったのだろうか。分からない。私は見事に演じきったはずだ。なのに、この反応は。

『……あ……じゃあね……』

次の瞬間、不通になる電話。私は首を傾げたが、まもなく私のくびれたスタイルのいい腹が空腹の叫びを上げたので、とりあえず食事をとるべくテーブルについた。

今日は何かが変だった。

そんな不快感をまといながら。

次の日、私が教室に入室すると、そこは別世界のような雰囲気だ漂っていた。クラス全員の視線が私に殺到したかと思うと、すぐにまた談笑を再開した。視線が私に殺到したときの静寂は、喧騒を静める先生の一喝以上だった。私はやはり首を傾げ、自分の席へと歩き出す。途中、すれ違う生徒に、おはよう、と優然な口調とともに微笑むが、誰一人として私に挨拶を返してくれる者は存在しなかった。それどころか、視界にさえ収めてくれない。私が不可視の存在まるで幽霊になったかのようにだった。加え、教室内に濃厚な霧が立ち込め、私の机の周りだけが晴れている。教室に私の居場所がすっかりなくなっていた。私は何が起こっているのか理解できずにいたが、思い切って肩を叩いて呼んでみた。

そして 拒絶された。

明らかに拒絶だと分かった。肩にかけた手を、まるでゴミを払うようにはねつけたのだ。

私は中学校時代にタイムスリップしたかと思った。

あの時と同じ空気、あの時と同じ居場所、あの時と同じ拒絶。それらが中学校時代と寸分たがわず酷似している。疑問と混乱が、怒涛のように私に押し寄せる。才色兼備と歌われ続けた私が、自らの沽券にかかわるようなミスを犯すはずがない。

私は完璧なはず。

今まで苦勞して積み上げてきた信頼や、羨望が、得体の知れない原因によって瓦解するなんて信じられない。

私は完璧なはずなのに。

なのに、どうして私を見てくれないの。

私を見て、みんな、私を見て。羨望の眼差しで、憧憬に染めた双眸で、私を見て

結局、私の願いは届かなかった。

その日、私は高校入学以来はじめて、偽善を使うことなく帰途に着いた。私は友人とつながる赤い携帯電話をベッドに投げ捨て、半ばすぎるようにして、白い携帯電話に飛びついた。

もう誰でも良かった。

私という存在を確認したかった。たとえそれが、私が作り出した人物でも構わない。

私は耳をすまし、電話がつながるのをただひたすらに待っていた。コール音が耳孔を震わせる。

『はい』

「わたし…だけど…」

そして私は死に物狂いでエリを演じた。たしかエリは、無邪気で天真爛漫、金切り声で話すはず。十分くらい話をしたと思う。突然、電話の相手が軽い調子で、恐るべき言葉を電波に乗せた。

『なんか、エリじゃないみたいだ』

「え…」

私は次の言葉が出てこなかった。「エリではない」と言われた。その意味するところは、私がエリを演じきれていないということ。

私は動揺を振り払うように叫喚した。

「そんなことない！」

私は相手の返答を待たずに会話を絶った。内心で激しく動揺し、動悸が速度を上げた。

私は黒い携帯電話に一縷の望みを託した。

マイの性格を冷静に考える。人間不信に陥っていたが、最近はずキカワのおかげで克服しつつある。そして、彼氏との仲も良好…。

私は携帯電話を強く握り締めながら反芻した。

セキカワは一人暮らしの貧乏学生で、いまだき珍しく携帯電話を持つていない。だから、彼のアパートにある固定電話にかける。

連続する呼び出し音。

お願い、出て。セキカワ、お願い。

十回目の呼び出しで、ようやくセキカワにつながった。私は安堵の息を漏らす。

『もしもし、セキカワですけど』

セキカワの野太い声帯に、私は涙が出そうになった。

「私…です」

その絶望は、かつて味わったことのないほど、私を暗闇に叩き落した。

『誰？』

その声は、私が誰であるか分からずに戸惑い、怪しむ声だった。

私はそれ以上何も言えず、セキカワとのつながりを絶った。私は小刻みに震えだす。ベッドの上で両足を抱え込んで、顔をそこに埋めながら、恐怖に打ち震えていた。

誰も私の存在を知らない。

演じ切れていたはずのエリ、マイ、学校での私。その三者が、誰の心の中にも存在しない。

何が間違っているのだろう。

声の調子、感情の起伏、言葉の陰影、濃淡。

その微妙なニュアンスが出来ていないのか。そんなはずはない。

私は完璧だから。私は完璧…。

エリじゃないみたいだ。

誰？

私よ。全て私。違うなんてことはない。演じていたとはいえ、それはれっきとした私自身。

ふと気づく。

私が演じている私を否定された私は……演じていない私は、どんな私？

私はどんな性格？

どんな人間？

本当の私は、誰？

エリのこと？

マイのこと？

それとも学校での私？

…あと、もう一人いたような気がする。

「私…は、誰？」

頭をかきむしると、指に頭皮からにじんだ血が付着している。膝の上に長い髪の毛が、何本も何本も落ちてくる。

「私…わたし…ワタシ…」

加速度的に動悸が増す。黙していると、頭の中にその音が反響する。戦慄が背中を駆け上がった。私という人間、性格の喪失。ひとつに定まらない私。性格を使い分けていたはずが、いつの間にかそれぞれが溶け合い、鮮明だった、白、黒、赤が、私の見知らぬ色に変化していた。

私の色が見つからない。

「あ……ア……」

そして、赤い携帯電話が鳴る。

私の震えが極限に達する。発汗が止むことなく私の肌をなぞっていく。携帯電話に手を伸ばすが、触れるまでには至らない。怖い。

次に、黒い携帯電話が鳴り響く。

私は部屋の隅まで逃げる。もう逃げ場はない。足がすくんで動けない。苦しい。

最後に、白い携帯電話が響く。

出来損ないの協奏曲が、部屋中を狂ったように回っている。嫌。止まらない不協和音。カプリッチオ。

私が混濁していく。何色なのかも分からない。知らない。理解できない。消えてしまう。私が。消える。キエル。消えてしまう。嫌。私は赤色。違う。白色。黒色かもしれない。もうひとつ。もうひとつあるはず。ナニイロ。教えて。誰か。ワタシハナニイロ。

徐々に目の前の色が消えていく。

嫌。消えないで。キエナイデ。

三方向から漂う瘴気が私の脳を侵し始める。音という瘴気。耳から侵され、全身に広がっていく。

痛い。私は耳をふさぐ。イタイ。消えていく。ワタシガキエテイク。首を激しく左右に振る。イヤ。嫌。タスケテ。瘴気から三人の人間が現れる。誰。ダレ。三人が無表情で接近してくる。嫌。戦々恐々とした思いが、私の未来を予見する。コナイデ。三人が私を取り囲む。無機質な瞳で私を見下ろす。死んでいる人間のそれ。三人が六本の手を伸ばす。私に近寄らないで。コナイデ。触らないで。

私は壁伝いに逃れる。半死人が私を急迫する。駄目。タスケテ。嫌。コナイデ。背中越しにベランダが見える。私はスライドガラスを開ける。一步一步近づいてくる。私は逃げた。視界が開ける。そこには何もない。気づいたときには空中に身を投げていた。三人は、三人とも私だった。私でない私。私は、私が落下していくのを見て、霧散した。

衝撃の後、ビデオカメラを地面に転がしたような画像が、しばらく私の視界を埋めていた。

気がつくくと、私はベッドの上にいた。自宅ではないことから、お

そらく病院であろう。

とりあえず自己紹介。

私の名前は、直藤沙耶、高校生。眉目秀麗な容姿を持ち、頭脳明晰、さらには、身体能力も他の追随を許さない。けど、クラスからは疎まれてる。私を簡単に紹介するなら、今のが最も分かってもらえると思う。

「気の毒にね。意識は戻らないんですって」

でも寂しくはない。偽善がくれた三人の友達がいるから。紹介するわね。

彼女の名前は

【END】

最終話（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

評価、感想、次回作の栄養になります。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5882a/>

ヒポクリット

2008年8月29日18時42分発行